

第1堰を登り切った個体は見られなかった。



捕獲率は10回潜って一匹、5分潜水して10分休む。



第1堰を鯉も登ろうとしていたが成功した個体なし。



第3堰で遡上確認。3年間調査して初めて確認出来た



第1堰下流で稚ボラ混じりのアユの群れ確認出来た。

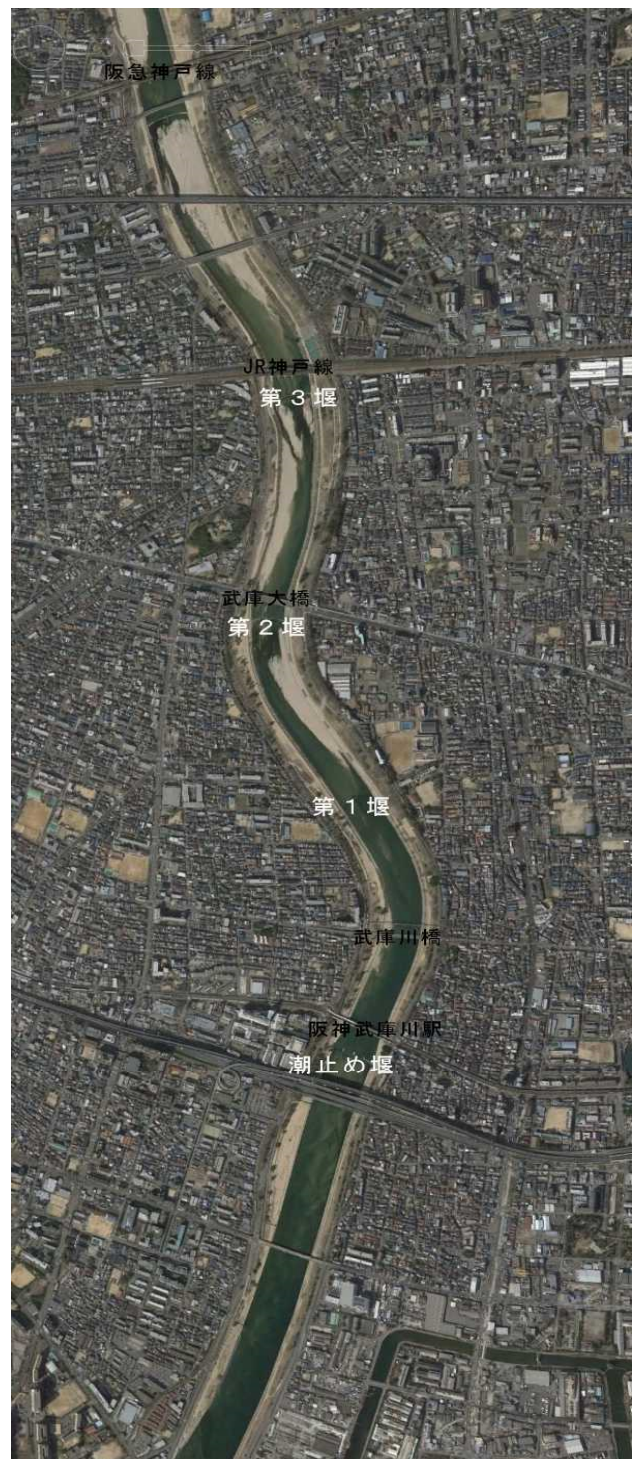


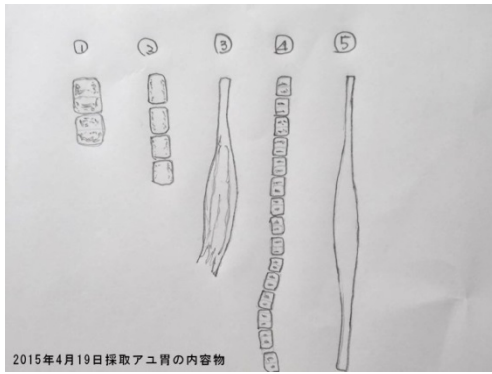
1号堰全景 甲武橋水位78cmでこの時季としては普通



1号堰右岸角に集まったアユをタモですくい取って計測

2015年4月19日調査		
番号	体長 mm	体重 g
1	82	4
2	83	3
3	75	2
4	80	3
5	76	2
6	82	3
7	78	3
8	87	4
9	89	4
10	89	4
11	82	2
12	76	2
13	70	2
14	82	3
15	83	2
16	73	2
17	72	1
18	77	1
19	66	1
平均値	75.1	2.4





3 個体解剖、未消化の内容物を検鏡した。

1 個体は、内容物が見あらず、胃腸はからっぽ。

もう 1 個体は、内容物は認められるものの、消化後顕微鏡による固形物確認出来なかった。

残りの 1 個体は明らかに未消化生物の残骸が認められた。

報告者は門外漢で確かなことは言えないが、珪藻の被殻は未消化で原型をとどめる考え、日本淡水プランクトン図鑑で調べ淡水珪藻類だろうと判断した。海産珪藻は淡水珪藻に比べ 10 倍の大きさがあるといわれていること

も判定要因の一つ。判断に誤りがないとすれば、海水域でのアユの生態は全く知らないが、淡水域では付着藻類を削り取るようにして食べる習性がある。(釣り人はアユの食跡を目当てに釣り場を決めている。)

海水域でアユの食跡が話題に上ることはなく、海で付着藻類を餌にしないと考えると、河口域に達し、直ぐ遡上するものと、淡水域に暫く逗留し、淡水付着藻類を食んで少し成長後遡上する 2 種類がいると推定できる。

いずれにしても海域から淡水域に変わる際、非常に大きな環境変化のほか食性も変わり想像を超える環境変化をどのようにして乗り越えるのか、大きな疑問と極端な変化を乗り越えるアユに自然の驚異を感じる。



住吉川のアユの群れ



住吉川の第1堰



暗く分かり難いが大きな群れが見られた。



大潮干潮時も断流にならず、遡上通路は残されている。

まとめ：18日16時頃1号堰で大量遡上に驚かされた。翌19日の1号堰、前日に比べれば少ないものの遡上確認、これまでの経験から5月中旬2号堰が遡上限界?だったが、19日3号堰で初めて遡上確認出来た事から、比較的早い時期から大量遡上したものと考えられ、潮止め堰転倒が大量遡上に寄与したものと考えられる。